

歌に詠まれてきた桜

4月といえば桜。誰もが小学校、中学校の入学時、また高校や大学への進学時の情景を思い出すでしょう。新学期。満開の桜の前で記念撮影……。国語の教科書の中にも桜にちなんだ短歌や俳句が紹介されています。半世紀前に私が使っていた本の中にあった好きな短歌は次のようなものでした。



ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ (紀友則)
花の色は移りにけりないたずらに我が身世にふるながめせしまに (小野小町)
願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ (西行法師)

どの句も桜の花に寄せる想いが伝わってきます。蛇足までに：

「2番目の句は『掛詞』が入っているぞ！どれかわかるかな？」との国語の先生の質問を思い出します。「『ふる』では『雨が降る』と『時が経る』を掛けており、『ながめ』では『長雨』と『もの思いにふける』を掛けていますよ」と――。

また3句目、如月(きさらぎ)とは陰暦の2月のことで、新暦の今より1ヵ月くらいずれていたことを知ると判り易いですよね。

きわめつきは次の短歌でしょう。

世の中にたえて桜のなかりせば春のころはのどけからまし (在原業平)

そろそろ桜の季節だが、一体いつ咲くのだろうか？またいつ散ってしまうのだろうか？とその有様も気になって仕方がない。だから、もしこの世の中に桜がなかったらどんなに心は穏やかであろうか、と桜が好きでたまらないことを逆説的に詠んだのでしょ。

次のような句もあります。

散る桜 残る桜も 散る桜 (良寛の作とも親鸞の作とも言われています)

どんなに華やかでも散らない桜はない。人は必ず死ぬもの。だから今を精一杯生きていこうではないか――人生の機微に触れた名句ですね。そして俳句では：

さまざまの事思ひ出す桜かな

俳聖・芭蕉です。生まれ育った伊賀上野での作。桜を見ていると、本当にいろいろなことが思い出されてきますね。

海外では、ワシントン・ポトマック河畔の桜が有名ですが、私も特派員としてパナマに駐在していたとき、乾季で暑い2月になるとパナマ運河入り口にある「バルボア通り」がピンク色の花に染まったのを思い出します。熱帯に桜が咲くわけではないはずなのに、桜に似た(数倍もある)花びらが一斉に開くと、車を運転しながら見る街路は桜並木みたいで、思わず太平洋の向こうの日本に想いを寄せ感慨にふけたものでした。やっぱり、サクラは“ニッポンの心”なのです。

